

1: 【The Black Note】第6話 ペーパーダーツの伝言  
2:  
3: ■オープニング  
4: セレスモノローグ「後の世に、闇の書・ブラックノートと呼ばれた書物がある。それは、12の精  
5: 霊核の伝説の裏に隠された歴史を書き記した漆黒の表紙の書物だった。決して歴史の表に晒  
6: されることのなかった哀しくて、切なくて、心がおしつぶされてしまいそうなほどの真相。  
7: でも、それは飾られた偽りではなく、紛れもない真実——」  
8:  
9: ■タイトルコール  
10: デュレ「The Black Note 第6話 ペーパーダーツの伝言」  
11:  
12: ■本編  
13: //教会の礼拝堂  
14: SE：小さくキィィとドアの開く音。  
15: SE：ふわっと風の抜ける音。さらに、かさっと紙が飛ぶような……  
16:  
17: セレス「——何だろ、これ……？ ペーパーダーツ？」  
18:  
19: SE：がさがさ。紙を開く音。  
20:  
21: セレス「——疑わず地下墓地大回廊で待て……。これって、父さんの字……」  
22:  
23: SE：セレス、ハッとして走り出して、礼拝堂の入口で立ち止まる  
24: SE：デュレ、追う。  
25:  
26: セレス「父さんっ！」  
27: デュレ「セレス、どこに行くつもりですかっ！」  
28: セレス「待って！ ——いない……。父さんっ！」  
29: デュレ「セレス！ お父さんが……。アルタさんを見たんですか？」  
30: セレス「ううん。見てない……。——デュレ、これは何かな……」  
31:  
32: SE：紙がかさかさ。セレスの手から、デュレの手へ  
33:  
34: デュレ「……疑わず地下墓地大回廊で待て……。言葉こそ違いますが、わたしが教会で見つけた伝  
35: 言と同じに思えます……。でも、何故、地下墓地大回廊にそんなにまで執着するのかし  
36: ら……。わたしたちは場所さえ判らないのに……」  
37: シリア「オレが知っている。……それにしても、セレスはよく一人で追い掛けていかなかったな。  
38: 褒めてやるよ」  
39: デュレ「わたしも褒めてあげます」  
40:  
41: SE：デュレ、セレスの頭をくしゃくしゃなでる  
42:  
43: セレス「ああ、もうっ！ やめてよ。髪の毛がくしゃくしゃになちゃうっ」  
44: シリア「あはははっ」  
45: セレス「……ひどいぞ、リボンちゃん」  
46:

47: SE：シリアをぎゅ。  
48:  
49: シリア「いてて、お互い様だろ？ オレの尻尾を笑ったバツだ！」  
50: セレス「何だと、この～っ」  
51: シリア「こら、やめる。オレで遊ぶな！」  
52: デュレ「……何じゃれてるんですか！」  
53:  
54: SE：げんこつ  
55:  
56: セレス「うぐう……。キミがきっかけを作ったくせに……」  
57: デュレ「わたしはいいんですっ！ ちょっとでも隙を見せたらこうなんだから。どうにかならない  
58: のかしら。リボンちゃんも、セレスと呑気にじゃれてるんじやありませんっ！」  
59: シリア「面目ない……」  
60: シェラ「……何だか、面白いチームですね。たくさんの人たちと過ごしてきましたけど、こういう  
61: 独特の空気を持っている方たちはいませんでしたね……。レイア？」  
62: レイア「独特というよりは緊張感のない。間違いじゃないでしょうか？ シェラさん」  
63: シェラ「適度にほぐれていると思いますけど？」  
64: レイア「……適当に……ですね」  
65: デュレ「でも、このペーパーダーツが投げ込まれたということはセレスのお父さんに限らず、誰か  
66: が教会の近づいたということですよ……。しかも、短い文面から察するに、わたしたち  
67: にアルケミスタにいて欲しくない何者かが……」  
68: セレス「でもお、あたしたちがここにいることを知ってる人なんてサムとバッシュしかいないけ  
69: ど、いて欲しくないにしてもそんな回りくどいことする必要がないし……」  
70: シリア「そもそも、ペーパーダーツに書いてあった字はアルタの字だったんだろ？」  
71: セレス「うん。だから、あたしは父さんが来たと思って……」  
72: シリア「なるほど。ペーパーダーツだけでは確証は得られないが、少なくとも、アルタがアルケミ  
73: スタに立ち寄ったか、今もどこかをほつき歩いている可能性があるだろうな？（何かを  
74: 知ってるような感じでクスと笑う）……捜して、みるか？」  
75: セレス「——本当？ いつもなら……。キミなら真っ先に反対しそうなのに」  
76: シリア「普段は慎重なんだ。だが、慎重なもの通り過ぎると臆病なだけ。何かの手がかりになりそ  
77: うだと思えば、時には大胆な行動をとってみたりするんだぞ」  
78: セレス「ふーん？ ま、オーケーしてくれるなら、理由はどうでもいいんだけど……？」  
79: シリア「まあ、そんなつれないことを言うなよ」  
80: デュレ「あ、わたしも——仲間に」  
81: シリア「デュレはダメだ。しっかりとレイアに仕込んでもらえ」  
82: レイア「だ、そうですよ。では、早速、魔法のトレーニングを始めましょうか？」  
83: デュレ「ええっ？ じゃあ、その前にセレス、ちょっと」  
84:  
85: SE：服を引っ張る  
86: SE：がさがさ。  
87:  
88: セレス「なん？」  
89: デュレ「これを持っていってください」  
90: セレス「……あの、デュレって一体、何枚の闇護符を持ち歩いてるの？」  
91: デュレ「百枚以上。さらにセレスのためにも予め用意しておいたんです」  
92: セレス「じゃ、今度のは何？」

93: デュレ 「フォワードスベルとバニッシュアイ。空間移動ができて、姿を隠せます」  
94: セレス 「そんなの便利そうなのを渡されたら、あたし使っちゃうよ？」  
95: デュレ 「使ってもいいんです。ただ、気をつけてください」  
96: セレス 「何に？」  
97: デュレ 「護符の向ける方向です！ これらは自分に向けて使ってください」  
98: セレス 「だ、大丈夫？ 異界に放り出されたり、死んだりしない？」  
99: デュレ 「しません！ バニッシュアイは出力調整済み、フォワードスベルはきちんと座標指定まで  
100: してあります。……サムの家……」  
101: セレス 「な？ 何でそんな危険地帯に決めるのさ。バッシュのうちにして」  
102: デュレ 「ダメです。サムの家には精霊核がありましたよね？」  
103: セレス 「ううん」  
104: デュレ 「精霊核は独自のフィールドを作り出します。つまり……」  
105: シリア 「つまり、フォワードスベルの痕跡が残らないってワケだろ？」  
106: デュレ 「はい。でも、バッシュの家だと、リボンちゃんが手を貸してくれないとそんなこと出来ま  
107: せんし、小細工してる時間ありません」  
108: シリア 「そりゃそうだ」  
109: セレス 「それより、ねっ？ もう、行っていいでしょ？ ……こんなところでのんびりしていた  
110: ら、ペーパーダーツを投げ込んだヤツがどこかに行っちゃう、だから……」  
111: デュレ 「……どうせロクでもないことになるに決まってるんでしょけどね。（ため息）……も  
112: う、好きにしてください。なるようにしか、ならないんでしょから」  
113: セレス 「じゃ、行ってもいいんだね♪」  
114:  
115: SE: セレスの駆け足。と、ドアの開く音  
116:  
117: デュレ 「……どうして、あの娘はああなのかしら……」  
118: シリア 「——もちろん、バッシュに似たからだろ？」  
119: デュレ 「え、ええ？ 今、何て言いました？」  
120: シリア 「さあ？」  
121: デュレ 「バッシュはセレスのお母さん。——この時代、もう、既に……？」（独り言）  
122: セレス 「ねえ、ちょっとリボンちゃん？ いつまで待たせるつもり。あたしは気が短いよ。早く  
123: 行かなきゃ、ホントに見付けられなくなっちゃうよ？」  
124: シリア 「ああ、今行く。そう、慌てるな」  
125: レイア 「では、デュレは今度こそ魔法のトレーニングです、問題ありませんね？」  
126: デュレ 「え、ええ、問題ないとは思いますが……」  
127: シリア 「じゃ、オレはセレスのお守りをしてから、デュレは頼んだぞ。シェラ、レイア」  
128: シェラ 「ええ、しっかりと頼まれましたよ、シリア。色々と画策を巡らせて、動き出すころには光  
129: の使える一流の闇の使い手……は無理でしょうから、効率のよい呪文の発動の仕方を改めて  
130: 教えますね。それだけで、レベルアップ出来ますよ」  
131: セレス 「だからっ！ リボンちゃん。いつまでくっちゃべってるつもりなのさああ？ あたしのお  
132: 守りをするんでしょ？」  
133: シリア 「どこから聞いていた？」  
134: セレス 「あん？ 何も聞いてないよ。あ～、またあたしの悪口言ってたんでしょ？」  
135: デュレ 「わ、わたしは何も言ってませんから、さっさと行ってください！」  
136: シリア 「はは、すまんすまん。じゃ、さっさと行って来るか——」  
137: セレス 「よっしゃ！ 出発っ」  
138:

139:  
140: //場面転換  
141: SE: 軽快な足音。  
142:  
143: セレス 「ねえ、リボンちゃん……」  
144: シリア 「……？ どうした……？」  
145: セレス 「もし、父さんが悪いことを企んでいたらどうしよう」  
146: シリア 「何か企んでたからといって、何も出来ないだろ？ 多分」  
147: セレス 「何も出来なくても、何もしないのは嫌だから」  
148: シリア 「そうか、行動派のお前らしいな」  
149:  
150: SE: 立ち止まる  
151:  
152: セレス 「（急に真面目に）リボンちゃん、あたしね、父さんが何を目論んでいるのを知りたい。  
153: 地下墓地大回廊で待つ。——二回もあんな手紙を用意して、どうして、いるかないかも判  
154: らないような、あたしをそんなところに呼ぼうとしているのか、知りたい」  
155: シリア 「あれがお前たちに宛てられたものかも怪しいと思うが……？」  
156: セレス 「そうかもしれないね。でも、あれは……ううん、判んない。けど、確かめたいんだ。ここ  
157: に来てから、どうして、父さんの影がちらつくのかをね。（ここから明るく）だって、そう  
158: でしょう？ 久須那一、久須那一とは聞いていたけど、今になって、と一つに父さんの名  
159: 前が出てくるなんて、不思議でしょーがないんだもん」  
160: シリア 「まあ、敢えて否定はしないが」  
161: セレス 「じゃ、そういうことだから、あたし、先に行ってるね？」  
162: シリア 「ちょ、ちょっと待て！ ……どうして、あいつはああなんだ？」  
163:  
164: SE: セレス、猛ダッシュ  
165:  
166: セレス 「もう……見つけられないのかな……。父さん……」  
167:  
168: SE: セレスの歩き回るような足音  
169: SE: アルタの足音  
170:  
171: セレス 「……父さん？」  
172:  
173: SE: 駆け足。  
174:  
175: セレス 「あれ……？ いない——？」  
176: アルタ 「……約束した日まで、まだ二日もあるぞ。——せっかちなのはバッシュに似たのかな？」  
177: セレス 「……え？」  
178: アルタ 「九年ぶり……だな？」  
179: セレス 「父……さん……？」  
180: アルタ 「魔法学園のジャンルーク学園長は元気になっているか？」  
181: セレス 「ホントに父さんの……？」  
182: アルタ 「どうかしたか？ まさか……俺が判らないと言うんじゃないだろうな？」  
183: セレス 「ううん……。ただ、あまりに久しぶりだからちょっと驚いただけだから……」  
184: アルタ 「淋しい思いをさせて、すまなかったな」

185: セレス「そんなのはいい……。けど、どうしてあたしが魔法学園に入ったって知ってるの？ 父さ  
186: んがいなくなったのは……」  
187: アルタ「そうだな。お前が学園に入るずっと前のことだ。……しかし、父さんに知らないことはな  
188: いんだよ。お前が魔法学園に入学したことも、遺跡の発掘をやっていることも、お前が水色  
189: の精霊核のかげらをずっと大事にしていることも」  
190: セレス「……だったら、どうして、あたしのそばにいてくれなかったの？」  
191: アルタ「いられるものなら、いてやりたかったさ……」  
192: セレス「そう……。父さんにあたしの気持ちなんか判らないよね。何でも知ってる父さんにもあた  
193: しの気持ちなんて判らないよねっ！ 母さんもいない。父さんもいなくなって、あたしがど  
194: れだけ、どれだけ淋しい思いをしたかなんて判らないよねっ」  
195: アルタ「セレス……」  
196: セレス「でも、もう、いいんだ。父さんは生きていたんだね。それだけで……」  
197: アルタ「確かに、生きてはいたさ……が、半ば死んでいたようなものかもしれないな……」  
198: セレス「それはどういう意味……」  
199: アルタ「父さんの言う通りに地下墓地大回廊に行ったら判ることだよ……。まあ、そんなことより  
200: も、十三世紀末、歴史的に価値ある時へようこそ。渦中の人として、歴史の内側からこの世  
201: 界を見られるなんて途方もない幸運だよ」  
202: セレス「あ……」  
203: アルタ「お前も苦労したんだろ？ お堅い協会の連中のことだ、十二の精霊核の謎を解く許可はも  
204: らえず、とうとう、協会を敵に回して、ここまで来たんだろ？（ちょっと、息を吸って）  
205: お前が俺を捜していることは知っていたよ」  
206: セレス「父さん……」  
207: アルタ「……お前が俺を追い掛けてくるのを待っていた」  
208: セレス「追い掛けて来なかったら？」  
209: アルタ「必ず追い掛けてくと判っていた。……1509年にシメオン遺跡を発掘した時に面白いも  
210: のを見つけたんだ。……バッシュの家でね。何を見つけたと思う？」  
211: セレス「判らない……。そんなの」  
212: アルタ「“デュレ”と名前の刺繍がある魔法学園の制服があった。魔法学園の設立は1398年、シ  
213: メオンが滅ぶのは今年、1292年。その因果関係はどこにあるか……」  
214: セレス「言いたいことがよく判らない」  
215: アルタ「判らない。か？ そんなはずはない。答えはもうお前の手の内にある」  
216: セレス「あたしの手の内に？ ウソだ……。そんな絶対ウソだ！ あたしは何も持ってない」  
217:   
218: SE：空から舞い降りてくる音。  
219:   
220: セレス「黒い翼の天使……」（つぶやくように）  
221: レイヴン「アルタ。そろそろ時間だ。」  
222: アルタ「もう、そんな時間になるのか」  
223: レイヴン「ああ、お目覚めの時にお迎えがいないと、うちのお姫さまがご機嫌斜めになる」  
224:   
225: SE：近づいてくる足音  
226:   
227: シリア「――そんなに慌てるな。時間はたっぷりあるんだろ？ それにあの教会に放ったペー  
228: パーダーツは何のつもりなのか、説明してもらおうかな？」  
229: アルタ「シリアか……。……年、とったな。随分と白くなったじゃないか。以前はもっと毛足の長  
230: い銀色の毛並みじゃなかったかな？」

231: シリア「……昔も今も変わらない。オレの毛並みは元から白っぽいんだ」  
232: アルタ「フッ、相変わらず連れないやつだ。真面目すぎると損をするぞ」  
233: シリア「かもな。だが、ようやくお前を問いただすチャンスが来た。真面目なもの悪くないぞ？」  
234: セレス「リボンちゃん？」  
235: シリア「何だ？」  
236: セレス「やっぱり、キミは父さんと知り合いなんだね――」  
237: アルタ「ちょっとした知り合いだ。なあ、シリア？」  
238: シリア「お前とは知り合いになりたくなかったな」  
239: アルタ「それはひどく嫌われたものだな。では、俺に言わせればシリアとの出会いは『人生最大の  
240: 失敗』だな。お前のせいで予定がこんなに狂ったんだ」  
241: シリア「オレのせい？ 違うな。敢えて原因を探ると言うのなら……マリス……」  
242: アルタ「では、こいつは？ 未来のお前が迷り込んだんだぜ？」  
243: シリア「……否定はしないが、あれはもう、避けられないだろうさ。二日後、地下墓地大回廊」  
244: アルタ「――。はっ。知っているのか？ なら、お前も避けられるに越したことはないだろう？」  
245: シリア「避けられるのならな。だが、時の理（ことわり）を崩すようなことをクロニアスが許しは  
246: しない。――もう、諦める。お前がどんなにがんばってもあいつは帰ってこない」  
247: アルタ「――時の精霊・クロニアスが何だと言う。時の理（ことわり）が何だって言うんだ。俺は  
248: バッシュさえ取り戻せれば、それでいいんだっ！ むしろ、お前は誰だ？ お前が知るはず  
249: もない先のことをどうして知っているのかな？」  
250: シリア「オレも精霊の端くれだから、クロニアスが黙秘しようとも少しは知ることができるのさ。  
251: 時がぬじれ、その隙間から色んなものがこぼれ落ちてる。例えば……セレスやデュレだって  
252: そうだろ」  
253: アルタ「まあ、そんなものかもしれないな。だが、一つだけ言いたい。お前たちは勘違いしてる。  
254: マリス召喚と俺は全く関係ない。たまたま、あの場所にいただけのことさ」  
255: シリア「では、誰がマリスを召喚した。その場にいたなら知ってるだろう」  
256: アルタ「そういうお前も召喚の場にはいたんだがな。覚えていないのか……。と言っても、シリア  
257: もかなりのガキだったからなあ、覚えていなくとも仕方がないが……。……言ってもいいの  
258: か？ 信じてたものに裏切られるのは辛いぞ」  
259: シリア「いいから、教えろっ！」  
260: アルタ「そんなに言うなら、教えてやる」（レイヴンに遮られる）  
261: レイヴン「おい、アルタ。いい加減にしる。時間に遅れるとうちの眠り姫は口やかましいぞ」  
262: アルタ「まあ、ちょっと待て。――シリア、急がなくとも、思い出す。むしろ、その時まで知らな  
263: い方が心安らかにいられるだろうさ。どうせ、俺たちは時という名の牢獄に捕らえられた  
264: 永遠の囚人、どうあがいても脱獄は不可能。そして、クロニアスが見て見ぬふりを決め込む  
265: のなら、俺はやりたいうちにやらせてもらう。それだけのこと」  
266: シリア「それのどこが悪い？ とお前は言いたいのか？」  
267: アルタ「ああ。あいつを取り戻すためなら、俺は何だって出来る」  
268: シリア「そうか……。お前がどの時代を見て歩き、どんな感想を抱こうと正直に言えば知ったこっ  
269: ちゃない。だが、運命は受け入れる。そうでなければ、お前こそ辛い思いをするだけだ。時  
270: の復元力はお前の想像を超えている」  
271: アルタ「試してみなければ、判らない」  
272: シリア「あいつの……。それが起きなければ……。違うか……。それは形は違ってても百パーセントの確  
273: 率で起きる。何故なら、その出来事なしにこの未来は成立しないからだ――」  
274: アルタ「……お前はやはり、このシリアじゃないな。どの時代から、紛れ込んだ」  
275: シリア「さあ、な。オレはオレ。他の何者でもない」  
276: レイヴン「アルタ！」

277: アルタ「セレスっ! (唐突に)お前がバッシュを殺す。覚えておけ」  
278: セレス「あたしが……バッシュを……殺す……?」  
279:  
280: SE: 飛び去る音。  
281:  
282:  
283: //場面転換  
284: SE: 夜。鈴虫、リリリ。か夜を示す何か  
285:  
286: セレス「……何か、憂鬱。こっちに来てから、あまりいいこともないよな。約束の日ももう明後  
287: 日だって言うのに何で、父さんが地下墓地大回廊で待っていると言うのか、さっぱりだし。  
288: ねえ、どう思う? デュレ?」  
289: デュレ「どう思うと言われても、特には何もありませんけど」  
290: セレス「むー」  
291: デュレ「少なくとも、久須那の封印を解くための手段は手に入ったから、最初の目的は果たせると  
292: 思いますけど……?」  
293: セレス「それはそうなんだけどさあ……。ここに来て、謎は増えるばかり」  
294:  
295: SE: 激しくドアをノックする音  
296:  
297: デュレ「誰かしら……?」  
298: シェラ「こんな時間にどなたでしょうか」  
299: バッシュ「あたしだ。開けてくれ。早く、誰もいないのか?」  
300: レイア「あの大声はバッシュですね……」  
301: セレス「ううっ——。恥ずかしい」  
302: デュレ「セレスが恥ずかしがったからってバッシュの性格は直らないでしょ?」  
303: セレス「そんなこと言ったってえ……」  
304: デュレ「じゃ、わたしが日頃セレスに対してどう思ってるかを知りたい機会と言うことで我慢しな  
305: さい」  
306: セレス「うぐぐう」  
307: バッシュ「あたしを無視するなんていい度胸だ。開けないのなら、蹴破るぞ」  
308: レイア「聞こえています。今あげますから、ちょっと待ってください?」  
309:  
310: SE: ドアが開いて、どたばた。  
311:  
312: バッシュ「ア、アルタがいるって聞いたけど、会ったのか? どこにいる?」  
313: レイア「うわっ! (または、ぎゃあ) バッシュ。落ち着いてちょうだい」  
314: バッシュ「落ち着いてる!」  
315:  
316: SE: 後ろから、のっそり足音。  
317:  
318: シリア「——アルタはもういない」  
319: バッシュ「いない? (上擦った声)サムはアルタがここに来てから二、三か月になると——」  
320: シリア「また、サムのやつか。余計なことを……。……あ〜、もう、面倒くさい! お前ら、さっ  
321: さと寝ちまえっ!」  
322: バッシュ「いや、アルタの居所を聞くまでは寝てやらん! 教える」

323: シリア「教えると言われても困るんだが——」  
324: セレス「ともかく、あたしたちは退散しても構わないでしょ?」  
325: バッシュ「そっちは勝手にしろ、あたしはシリアに用があるんだ」  
326: セレス「だってさ。デュレは疲れてるんでしょう。折角のチャンスを逃さずに。ねっ!」  
327: デュレ「そうですね……」  
328: バッシュ「邪魔はなくなった、さあ、シリア、教えてもらおうか!」  
329: シリア「そんなことをと言われてもどうしようもないんだけどなあ……」  
330:  
331: SE: 足音  
332:  
333: セレス「はあ〜あ……。我が母親ながら疲れるわ……」  
334: デュレ「そう? ご愁傷さま」  
335: セレス「はいはい。もお、どうでもいいです。ゆっくり、お休み、デュレ」  
336: デュレ「お休みなさい」  
337:  
338: SE: ベッドにごろん。  
339: SE: 眠れないごそごそ。  
340:  
341: デュレ「眠れないの……?」  
342: セレス「うん……」  
343: デュレ「……バッシュのこと?」  
344: セレス「ううん」  
345: デュレ「お父さんのこと……?」  
346: セレス「うん……」  
347: デュレ「——時の牢獄……。抜け出せない堂々巡りの……メビウスの輪」  
348: セレス「遠いところまで来ちゃったなって。どうしたらいいんだろって。……父さんが言った。  
349: あたしが……バッシュを殺す」  
350:  
351: SE: 草木の揺れるようなさわさわと  
352:  
353: デュレ「セレスがバッシュを殺すっ?」(声が裏返る?)  
354: セレス「わっ、し〜し〜。みんなに聞こえたら大変っ」  
355: デュレ「礼拝堂を挟んで、反対まで声は届きませんよ。バッシュの大声じゃあるまいし……」  
356: セレス「そうだけど……。でも、父さんの言ったことがホントになるんだったら、あたしはどうす  
357: べきなんだろう。どうしたら、バッシュを……」  
358: デュレ「また、そんなことを聞く……。どうしようと言われても、その状況下に置かれてみないと  
359: 答えなんか出せません——」  
360: セレス「そうなんだけど、その時が来るのが怖いんだ、あたし」  
361: デュレ「もうすぐ、約束の日が来ます。それまで待ちましょう。そうしたら、全てが判るはず」  
362: セレス「でも、きっと、その約束の日には何かがあるんだよ……。だから……っ!」  
363: デュレ「それでも、待ちなさい」  
364: セレス「うん……」  
365:  
366: //場面転換  
367: SE: パチパチと炎の燃える音  
368:

369: レイヴン「どうした、アルタ。ずっと、炎を見詰めてる」  
370: アルタ「……うん。ああ、そろそろ始めようかと思ってな……」  
371: レイヴン「終わりを……始めるのか？」  
372: アルタ「終わりを始めるか。キザに言えばそうなるが……。終わればいいな。呪縛から解き放たれ  
373: るにはそれしか方法がない。だがな、俺の本当の気持ちも判って欲しい」  
374: レイヴン「母と娘……か？」  
375: アルタ「ああ。——届かないと思う。ただ、家族だったからな。あいつが帰ってこないと判った時  
376: から、俺はずっと輪のなかさ。だが、クロニウスが見て見ぬふりをしていても、俺が時の理  
377: (ことわり)に届くことは永遠にないのかもしれない……」  
378: レイヴン「やけに感傷的になったもんだ。年取ったってコトか？」  
379: アルタ「かもな。……どちらにしても、この終わりのない輪から抜け出すさ。そして、終わりにし  
380: よう、何もかも」  
381: レイヴン「ああ」  
382: アルタ「では、予定通りにレイヴンはあの連中をシメオンに追い立ててもらおうか。だが、簡単に  
383: は帰さない。……いい機会だ。俺たちにたむかうとどうなるか教えてやれ」  
384: レイヴン「成る程。そお言うわけですか。愛の鞭……か」  
385: アルタ「バカを言うな。……いいか、連中には闇魔法の使い手がいる。光の天使とはあまり相性が  
386: 良くないからな、気をつけろよ」  
387: レイヴン「ふん？ そいつは予め消した方がいいのか？」  
388: アルタ「いや。そんなのはどっちでも構わない。レイアはこの時代で一、二を争う使い手だから  
389: な。お前が人間風情に後れをとるとは全く思っていないが、念のためな」  
390: レイヴン「いつも、お前の娘と共にいるダークエルフじゃないのか？」  
391: アルタ「あれか？ あれは……パワーは桁外れだが、使い方を心得ていないただのヒョッコだ。そ  
392: いつの将来を潰すのもいいが、目先のことを片づけるのが先だな。明日、明後日にはシメオ  
393: ンにいてもらわないと困るんだよ」  
394: レイヴン「なるほど、とりあえず、ダークエルフは放っておいて、俺は闇のレイアを気をつけてお  
395: けばいいんだな。どちらにしても、取るに足らん」  
396: アルタ「人間としてはハイレベルだから、油断するなよ」  
397: レイヴン「……油断？ はっ！ 見くびらないでもらいたいね。俺が本気になれば、こんな小さな  
398: 町など一撃で廃虚に出来るぜ？」  
399: アルタ「そこら辺はお前の好きにしたらいい。ただし、適当なところで引いてやれよ」  
400: レイヴン「ああ、殺しは趣味じゃないんでね。ところで、アルタ。本当は何を望んでいるんだ？」  
401: アルタ「何度、聞いても答えは同じさ……」  
402: レイヴン「……お前の嫁さんのことだったか？」  
403: アルタ「その通りだ。俺にはあいつが全てなのさ。……何度も言わせるなよ。——レイヴン、お前  
404: がマリスの無事を願うのとおんなじことだ」  
405: レイヴン「そうか……。ならば、今更、多くを問う必要はない……と言う訳だな」  
406: アルタ「お前はお前の思うまま。俺は俺の思うままだ。お互いの最善に届けばいいな……」  
407: レイヴン「そう信じるしかないだろうさ……」  
408: アルタ「そうだな」  
409:  
410: SE：歩き出す音。  
411:  
412: レイヴン「さてと、俺もぼちぼちやらせていただきますか……」  
413:  
414: SE：空に舞い上がる音

415:  
416: レイヴン「碧空遙かなる神の領域より降り立つ純粹なる光の思考よ。我が右腕に宿り、全てを滅す  
417: る破壊のパワーを体現せよ」  
418:  
419: SE：ぎゅういいいいん。  
420:  
421: レイヴン「ターゲットング……。——光弾（こうだん）！」  
422:  
423: SE：ドオオオオオオン。  
424: SE：悲鳴と怒号。  
425:  
426: レイヴン「……下らないな。破壊など」  
427:  
428: //場面転換：シェラの教会・やっぱり、夜  
429: SE：ごごごと地鳴り  
430:  
431: セレス「ねえ、デュレ。街の方が騒がしいね」  
432: レイア「——あちこちから、火の手が上がってるような……」  
433: デュレ「アルタ？」  
434: レイア「いえ、アルタではないようです。あれを」  
435: デュレ「黒い翼の天使……。カラミティエンジェル……」  
436: レイア「……こちらを見て、笑っています。下に降りましょう、早く！」  
437: セレス「何？ 何？ 何があったの？」  
438:  
439: SE：階段、転げ落ち。  
440:  
441: セレス「あいたたあ。何すんのさっ！」  
442: レイア「ごめんなさい、でも、今はそれどころでは……」  
443:  
444: SE：むぎゅ  
445:  
446: セレス「うぎゃあ！ 骨が折れるうっ」  
447: デュレ「ま、可哀想な、セレスちゃん」  
448: セレス「……少しでも可哀想だと思うんなら、手を貸せえ！」  
449: パッシュ「——何やってるんだ、お前ら、騒々しいぞ」  
450: レイア「早く、シェラさんを連れて」  
451: シェラ「何事ですか？」  
452: レイア「光弾で狙われています。時間がありません」  
453: シェラ「落ち着きなさい」  
454: レイア「でも、あれを防げるシールドは——」  
455: シェラ「シールドだけが守りではないでしょう？ レイア、デュレ、守護結界を張りなさい。広さ  
456: はわたしたちのいる場所だけで十分でしょう」  
457: レイア「しかっ！」  
458: シェラ「異論を唱える前にやりなさい。そう、結界は二重に。レイアが外側。デュレは内側に張り  
459: なさい」  
460: デュレ・レイア「はいっ！」

461:  
462: SE: チョークで線を引くような音。  
463:  
464: デュレ 「では、みんな、魔法陣の内側に入ってください」  
465:  
466: SE: 足音。  
467:  
468: セレス 「ちょっと狭い。バッシュ、足踏まない！」  
469: シリア 「そういうお前こそ、尻尾を掴むなっ！」  
470: シェラ 「静かにしなさい」  
471: デュレ 「闇の使い手、デュレの名により、神聖なる闇の支配者・シルト。闇の無限の吸収力を用い  
472: 我らを邪なる精霊使いより隔絶する結界を形成せよ。――守護結界っ！」  
473: レイア 「深遠なる闇の精霊・シルト。闇の使者、レイアの思いを聞き届けよ。ダブルスベル！ 我  
474: らを悪しき精霊使いより守護する結界を求む」  
475:  
476: SE: 激しい攻撃。  
477: SE: 結界が張られる音。  
478:  
479: デュレ 「魔法攻撃は防御できても、瓦礫はっ！」  
480: シェラ 「フィジカルディフェンス！」  
481: デュレ 「シェラさん！」  
482: シェラ 「この程度の魔法くらいまだ使えますよ。ですが、……流石に天使が相手では完全に防ぎき  
483: るのは難しいですね」  
484: セレス 「そんなのってありかい？ 何かないの？ ねえっ」  
485: デュレ 「あるもないも、ないんだから仕方がないでしょ！」  
486: シリア 「伏せる！ 結界が崩壊するっ！」  
487: デュレ 「セレスこそ、まともな魔法を使えないんですか！」  
488: セレス 「あぐ……」  
489:  
490: SE: 様々なものが瓦解していく音。  
491: SE: からからと小石の転がるような音。  
492:  
493: セレス 「うああ〜。もう、最悪。階段から突き落とされるし、太股は踏まれるわ。……まだ、レイ  
494: アの足跡が残ってるし。ついでに教会の下敷きだなんて」  
495: デュレ 「(不意に) こんなこと歴史の教科史に載ってましたか？」  
496: セレス 「うな？ いや、その、歴史は苦手で……」  
497: デュレ 「なかったはずですよね……。時の流れが切り替わる……」 (眩くように)  
498: セレス 「え、何？ デュレ、聞こえなかった」  
499: デュレ 「何でもありません。急いで、アルケミスタから脱出しましょう、それが賢明です」  
500: セレス 「そうだね」  
501: バッシュ 「……あたしは行かないぞ」  
502: セレス 「バッシュ？」  
503: シェラ 「今は引きなさい。バッシュ」  
504: バッシュ 「しかし、あたしはアルタに会うまでは帰らない――。その為にここに来たんだ。折角、  
505: 掴んだ手掛かりを放すわけには――三百年だぞ。判るか」  
506: シェラ 「子どもみたいな事を言うんじゃないやありません。あなたはわたしよりも年上なんですよ？」

507: バッシュ 「う〜っ！ でも」  
508: シェラ 「ここはデュレに従った方が間違いありません」  
509: デュレ 「では……。今度こそ、いいですよ？」  
510: セレス 「……うん」  
511: デュレ 「我が名はデュレ。闇の力を操るものなり。闇は邪にあらず。追憶の片鱗に住まう孤独の想  
512: い。善良なる闇の精霊、シルトよ。呼び声に応えよ。空間を歪め、飛翔する力を我に与え賜  
513: え」  
514:  
515: SE: 呪文発動！  
516:  
517: デュレ 「……フォワードスベルっ」  
518:  
519: SE: きゅいいいん。  
520:  
521: デュレ 「あの天使が結界をはっていないことを祈ってください」  
522: セレス 「張ってあったら？」  
523: デュレ 「九割方、跡形もなく消し飛びます。自分が死んだことも判らないくらいに」  
524: セレス 「はん？ 上等じゃん？」  
525: デュレ 「上等ですか？ ――じゃあ行きますよ。……キャリー……」  
526: レイヴン 「イリミネート・トランザクション！」  
527:  
528: SE: 魔法がかき消されるような音。  
529:  
530: セレス 「誰っ？」  
531: デュレ 「……こんなコトが出来るなんて……」  
532: セレス 「――キミは……父さんと一緒にいた……」  
533: レイヴン 「お初にお目にかかります。お嬢様がた」  
534: セレス 「おばさんもいるけどね」  
535: バッシュ 「おばさんで悪かったな」  
536:  
537: SE: ゲンコツでゴン！  
538:  
539: セレス 「うぐう……」  
540: バッシュ 「お前は？」  
541: レイヴン 「……お嬢様がたを懲らしめてこいとある方から言われたのでね」  
542: バッシュ 「……ある方……？」 (セレスのセリフと重ねて)  
543: セレス 「もしかして、サディスト？」  
544: デュレ 「何を言ってるんですか……。――セレス」  
545: レイア 「動かないでください」  
546: レイヴン 「む？」  
547:  
548: SE: 誰かが走っていく音  
549:  
550: セレス 「あっ！ バッシュ？ ――デュレ！ バッシュがどっか行った！」  
551: レイヴン 「まあ、あれはいいか……」 (バッシュを見て眩くように)  
552:

553: SE：どたどた  
554:  
555: デュレ「ちょっと、セレスこそ、どこへ行くんですかっ。ああ、もう、この非常事態に！」  
556: レイア「……相当、手を焼いるんですね」  
557: デュレ「ええ……。こんな時でもなければ、首に縄付けてでも引き戻すんですけど……」  
558: レイア「バッシュを追い掛けていったなら、止められないと言う訳ですか」  
559: デュレ「ま、止めても止まらないから。止めるだけ無駄なんですけどね。いつも」  
560: レイア「まあ、それはそれでいいですけど。確か、フォワードスベルの闇護符をセレスに渡してい  
561: いましたね？」  
562: デュレ「え？ ええ？」  
563: レイア「あれは何人まで空間転移をさせることができますか？」  
564: デュレ「基本的に数の上限はありませんが、護符の完成度を考えると、精々、二人か三人が」  
565: レイア「実行してみなければ判らない……と言う訳ですね……」  
566: デュレ「つまり、そうです」  
567: レイヴン「で、俺はどうしたらいいのかな？」  
568: レイア「話が終わるまで静かに待っていてください」  
569: レイヴン「……待ってやってもいいが、少なくとも敵を前にして言う言葉ではないな」  
570: レイア「……あなたは……敵だったのでしょうか？ レイヴン」  
571: レイヴン「さてね。が、久須那を目覚めさせようと言うなら敵……かな。しかし、敵か味方かな  
572: どと、つまらない区分はしないでもらいたいね。二元論は時に真実を見落とす……」  
573: レイア「そうでしょうか？ この場合、中間などあり得ないと思いますけど——」  
574: デュレ「レイアさん。この方と知り合いなんですか？」  
575: レイア「……知り合いではないですね……。顔と名前を知っているだけです」  
576: レイヴン「そうだな。俺もレイアの名を知ってるだけだ。闇の使い手ナンバーワンと言えばお前の  
577: ことだ」  
578: レイア「ナンバーワンというのは、褒めすぎではありませんか？」  
579: レイヴン「そうかな？ 俺は褒め過ぎだとは思わないが」  
580: レイア「ありがとう。——ところで、デュレ、シェラさんを連れてこの場所を離れてください」  
581: デュレ「でも、どこへ！」  
582: レイア「ここじゃなければどこでも構いません」  
583: デュレ「そんな無茶言わないでください。（ハタと気が付いたように）ねえ！ セレスとバッシュ  
584: とリボンちゃんは！」  
585: レイア「……向こうは向こうで、何とかすると思います。だから……」  
586: レイヴン「自分は犠牲になっても小娘と老婆は助けようとか？」  
587: レイア「おあいにくさま、わたしはそんなに美しくはありません」  
588:  
589: SE：二の足を踏む。音？  
590:  
591: レイア「何をぐずぐずしているんですか？」  
592: デュレ「——いやです」  
593: レイア「デュレはいいでしょうけど、シェラさんはどうするつもりです？」  
594: レイヴン「——年寄りに手を出すほど下衆じゃないから安心しろ。ただし、お前たちが俺を楽しま  
595: せてくれたらという条件付きだけどね」  
596:  
597: SE：緊張感の漂う音。ひょおおおとか